

特集「腎臓病診療の進歩」

巻頭言

京都府立医科大学大学院医学研究科
腎臓内科学

玉垣圭一



腎臓病が進行すると腎臓の機能が低下し、末期腎不全に至る。透析や腎移植などの腎代替療法が必要になるだけでなく、脳卒中や心筋梗塞など心血管疾患（CVD）のリスクが上昇することが知られている。これらは患者の生命予後や生活の質の低下に大きな影響を及ぼすだけでなく、医療費の増加から社会にとって大きな課題ともなっている。

高齢化、糖尿病・慢性腎臓病（CKD）の増加を背景に、重症で侵襲的治療を受けた患者や、ICUで全身状態が悪化した患者では、急性腎障害（AKI）がしばしば認められる。AKIの診療においては集学的なアプローチに加えて、その後の腎機能回復を含めた予後についても気を配る必要がある。こういった「Critical Care Nephrology」の概念について、集中治療医学と腎臓病学の両者に精通された成宮博理先生に概説していただいた。

わが国で透析療法を受けている患者数は、現在34万人を超えている。新型コロナウイルス感染症の影響もあって2022年末は前年に比較して減少したが、それまでは緩やかな増加傾向が続いていた。一方でCKDの患者数は約1,480万人と推計され、新たな国民病ともいわれている。CKDは初期には自覚症状に乏しいが、血液・尿検査により診断が可能である。このため早期に診断し、適切な治療を行うことで重症化を防ぎ、透析導入時期の後ろ倒しやCVDの発症を抑制することが求められている。上野里紗先生には市中病院での臨床経験を踏まえて「CKD診療の最前線」を執筆いただいた。CKDとCVDの間には密接な関係が報告されており、高齢化に伴う両者の増加や、SGLT2阻害薬に

代表される新規治療薬の登場によって注目度が増している。草場哲郎先生には「心腎連関と腎うっ血」について、基礎研究の最新の知見を交えて紹介していただいた。

CKDが進行して腎不全に至ると、体内から老廃物を十分に除去できなくなり、腎代替療法（透析や腎移植）が必要になる。わが国では2021年の新規導入患者数が血液透析38,141人、腹膜透析2,370人であった一方、2021年の腎移植件数は1,773例（生体腎1,648例、献腎125例）であった。このように血液透析を選択する患者が多いが、患者のQOLの観点から腹膜透析や腎移植の普及推進が必要と考えられており、適切な腎代替療法を推進するために診療報酬改定で導入期加算や指導管理料の見直しが行われてきている。瀬川由佳先生には「腹膜透析の特性と適応」として、腎代替療法の選択に活かせる知識をまとめていただいた。本学附属病院では2023年から泌尿器科と腎臓内科とが連携して腎移植を行う新体制を構築しており、奥見雅由先生には「免疫抑制療法の変遷から見る腎移植の進歩」について、新体制での免疫抑制プロトコルも含めて紹介していただいた。

さいごに、桐田雄平先生には「腎領域の研究最新の話」を執筆いただいた。iPS細胞、オミクス解析、遺伝子編集技術といった最近の研究手法について、限られた紙面ではあるが本学での成果も交えて概説していただいた。

本特集では腎臓病診療の進歩について、本学および関連病院で活躍されている先生方に執筆いただいた。執筆者の先生方に感謝申し上げるとともに、読者の皆様には腎臓病診療にご興味を持っていただければ幸いである。